

夏休み親子教室

生ごみは、「土に返せば立派な資源になる」ことを子どもの頃から知ってもらおうと、夏休みに入っすぐの平成26年7月24日(木)に『ダンボール方式生ごみ(減量化・堆肥化)講習会』を開催しました。今年は、市内在住の子どもたちと保護者、6組13名が参加してくれました。

最初は、緊張気味の子どもたちでしたが、生ごみを投入中の堆肥と熟成した堆肥の違いを手で触れたり、持ち寄った果物や野菜の皮、卵の殻などで堆肥を作っているうちに、徐々にリラックスしている様子でした。

後日、生ごみが出ると喜んで入れに行くようになり、楽しく生ごみが減りましたという声が参加者からあがっていました。(T.A)

◎ダンポスト(家庭用ダンボール製生ゴミ処理器)を使用



～前回の参加者の感想～

生ごみの処理は、今まで色々と試してみました。庭に直接埋めたり、外にダンポストを置いたりしましたが、外に出て、ごみを捨てるのは手間が長続きしませんでした。

そこで、今回は、台所の片隅に置いてみました。近くにあるので生ごみを入れて混ぜるのも簡単ですし、臭いも少なく、虫に刺されるなどの悩みも解決しました。

生ごみを入れ続け1年が経ちました。そろそろ取り替えようかなと思いつつも毎日ごみを入れてしまいます。



世界の窓から

世界の栄養不足人口は、約8億4000万人といわれ、8人に1人がお腹をすかしていることになります。

ハイチも貧しい国で、約5%の富裕層が国の富の半分を所有し、約80%の貧困層が残った富を分け合っています。また、食事について、貧しい人は、1日1食あればよい方で、コーヒー1杯やバナナ1本の日も珍しくないとか…。学校では、給食があっても週に2回程度で豆ご飯の1皿だけという状況が見受けられるそうです。

しかし、日本に目を向けると、毎年、食品関連業者から約714.5万トン、一般家庭から約1,013.5万トン、合計すると約1,728万トンもの食品が廃棄処分されているそうです。

このような世界の現状も踏まえ、「もったいない」の発祥国に住む私たちは、食品ロスについて考えていかなければならないのです。(山田在住のSさん)

参照 農林水産省「平成23年度推計」・ハイチ支援レポート

◎食品関連業者は、1045.5トン分を肥飼料化しています。

編集後記 ～ごみの発電と電力の自由化～

全国的な動きになっているごみ発電。見学に行った平成26年9月5日時点で売電価格は、1キロワット当たり、PPS(大手電力会社とは別の特定規模電気事業者)で約15円とのことであった。従来は電気を消費するだけだったごみの施設が電気を自給自足し、更に余剰電力を売電できるようになったことは感慨深い。都市鉱山の如く私たちの住む社会は、ごみという発電燃料の一大生産地である。2016年、いよいよ一般家庭への電力自由化が始まる。長きに渡って続いてきた独占状態の電力供給システムがガラリと変わる時代に入る。ごみも貴重な電力の燃料となる時代に…(R.K)



へらすぞう

第19号 2015年3月

あきる野ごみ会議は、市民・事業者・市の3者が協力して活動している団体です。



1日に約55トンのあきる野市から出た可燃ごみ(破碎した不燃・粗大ごみの可燃部分を含む)が新ごみ処理施設(熱回収施設)に搬入されています。

◎収集車では、約23台分に当たります。



23台



1.2台

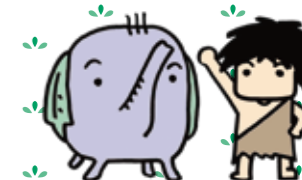
最終処分場へ

可燃ごみを焼却処理すると全てが消えてしまっていると思いきや…焼却しても、約5%は飛灰処理物として残ってしまいます。

例えば、収集車23台分のごみを燃やすと、残った約1.2台分の飛灰処理物は最終処分場に埋立てなければなりません。(C.S)

飛灰: バグフィルタ(排ガス処理装置)で取れた細かいほこり状の灰やボイラーなどに付いて払い落とされたもの。

私たちに、何ができるだろう。



へらすぞう げん人くん